
ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

九十九迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

【Nコード】

N2160Z

【作者名】

九十九迅雷

【あらすじ】

大日本帝国海軍の誇るエースパイロットの中でも最年少の22歳「ラバウルの天使」こと宮本靖中尉は1944年の7月、局地戦闘機紫電二一型、通称紫電改のテスト飛行中、エンジンの故障に見舞われ亡き者になってしまった。

天国で神に詫びられ彼が転生させられた世界は人類とネウロイの戦争が繰り広げられるストライクウィッチーズの世界だった。

今まで戦闘機乗りとして戦ってきた知識や記憶が残ったままの彼は

転生しても尚、持ち前の戦闘力を武器にネウロイに立ち向かう。

第0話 プロローグ（前書き）

衝動的に書いてみました。反省はしているが後悔は微塵もない。

第0話 プロローグ

「ここは何処なんだろう？」

気がつけば、私は周りが全部真っ白な空間に立っていた。多分だが、死んだんだろう。

私は宮本靖みやもとやすし。1944年7月8日没。悲しいことに享年22歳だ。

生前は一応、凄い偉業を成し遂げたみたいだけど、最期はあっけなかったなあ…。

「目が覚めたようじゃの。宮本靖君」

……誰、この人？ 私の目の前には神父さんみたいな格好をして白い顎鬚に優しそうな雰囲気目の。何処か神々しい覇気の漂うお爺さんが突如現れた。

「なんと、おぬしは純朴なんじゃなあ。そう言って貰えてワシも嬉しい」

この人、読心術が使えるみたい。ますます凄い人だ。……今の状況からして、神様とかなのかな。

「ふおおおお。おぬしは察しが良いのう。いかにも…ワシはこの世界を司る神。ミカエルとでも名乗っておこうかの」

「そ、そうなんですか！」

「うむ。さて、おぬしには本当に詫びねばならんのじゃ」

……？ 神様、どうしたんだろう。

「実は、お主の乗っていた紫電改…だったかの？ あの機体のエンジンにはワシの部下の所為で潰れてしまったんじゃよ」

「いえいえ、まあ死んだものは仕方ないですし、私みたいな未熟者が生きていてもそこまで永くは生きれなかったでしょう。神様やその部下さんが気に病まれることはないですよ」

事実、あの戦争ではもはや、帝国が勝てる要素が皆無に等しかった。

あと1年持つか持たないかだったろう。

「ふおつふおつふお。何を言うかの。撃墜数58機、25対1でも生還した“ラバウルの天使”は」

ラバウル…。生前、私が戦っていた場所で、凄惨な戦地の1つだ。でも、天使と言うあだ名はそこまで好きではなかった。

「本当にすまんかったの…。おぬしのような善良な人間を…。そうじゃ！君。転生してみる気はないかね？」

転……。生…？

「うむ、元いた世界とは別の世界に生を受けるんじゃ。おぬしにはもう1度好きに生きる権利があるからのう」

「じゃ、じゃあ。もう一度戦闘機に似たような物に乗れる世界に行きたいです！」

もう1度人生をやりなおせるのなら！

「ほう。何でじゃ？」

「私は、坂井さんや、笹井さんをはじめとする尊敬する方々にたくさん教えてもらいました。転生しても、この教えを大切にしたいんです」

笹井さんはもう亡くなってしまったから…。余計にその思いが強まる気がした。

「じゃあ、ストライクウィッチーズの世界なんてどうじゃ？」

「すたらいくいつちーず、ですか？」

「うむ、知らないのも無理はないの。戦後数十年も後に書かれた作品じゃ。その世界には、おぬしが挙げた2人をはじめ、多くの搭乗員をモデルにした人物がある。…と言っても、みんな女性じゃが」

なんと…。ミカエルさんは説明を続ける。
「ネウロイという怪奇な生物と戦う女性達の物語なんじゃ。魔法を使つての、戦闘機に似た物を足に履いて動かすんじゃ」

その世界では人を殺さなくて良いんですね。

「そうじゃの。では、ワシはおぬしを気に入ったから、なにか才能を授けるぞい」

「い、良いんですか？」

「なに、遠慮せんで良い。元々はわしらの所為でおぬしが死んでしまったんじゃ。むしろこれくらいさせてくれんかの」

お言葉に甘えることにした。

「じゃあ、人の考えていることがわかるようにはなりませんか？」

「うむ。読心術じゃの。構わんよ。しかしどうしてじゃ？」

生前は鈍感な人間で通じてましたから……。

「じゃあもう1つはワシが勝手に、翼を授けるぞい。魔法力が切れるとき、これを使うと良い」

…ありがとうミカエルさん。

「ふおふおふお。あ、ストライクウィッチーズでは固有魔法というものがあるぞい。なるべくおぬしの意向に沿ったものにしよう」

「じゃあ、集中力をあげる魔法があればそれでお願いしたいです」

「わかったぞい。じゃあ、そろそろ時間のようじゃ。次の人生はよく生きるんじゃよ」

本当のお父さんのような人だったな。私の体を光が包みはじめた。

「ありがとうミカエルさん！ もしまう一度ここに来たら、今度は仲良くしてくださいね！！」

私はそう言った次の瞬間消えた。

「ふう、良い青年じゃったのお。戦争はむごいものじゃ……。なぜあんな天使のような子が、若くして死ぬんじゃろうなあ……」

ミカエルさんの呟きが、僕に聞こえたはずもなかった。

第0話 プロローグ（後書き）

プロローグ長くなりすぎました…。

オリ主紹介

【名前／読み】宮本靖／みやもとやすし

【年齢／誕生日】19歳／3月21日

【体格】172cm／60kg

【所属／階級】扶桑公国海軍／大尉

【愛機】A7M2烈風一型

【武器】九九式二号四型20mm機関銃、コルト・ガバメントM1911A1、ナイフ×12（袖などに隠している）

【服装】第二種軍装の上下（坂本さんの上着と同じ物）下には紺色のアンダーシャツとロングパンツを着用。

【固有魔法】『集中』靖曰く『フォーカス』ある一点のことに集中し、攻撃力を向上したり敵の攻撃を反射したりする。

【使い魔】鷹（懐かれた）

【トレードマーク】真ん中に赤い三日月、その右横に白い鷹、その左に天使の翼。

【容姿のイメージ】

19歳の割にかなり若く見えるあどけない容姿ため、サーニヤや芳佳と同じくらいの世代に見られる。髪の色は黒。長さは女性のセミロングくらいまであり、ワックスを付けてもいないのにふわわりとしている。

パツチリとした碧眼が特徴的で、顔立ちは整っている。そのため女装しても似合うと思われる。

優しいような雰囲気を持っていて見る者を癒し、母性本能をくすぐる。前の世界では天使に例えられたりもしていた。

肌の色は男だがあまり日焼けしないので色白。ほっそりしてそうに見える。実は必要な筋肉はついている。

【声のイメージ】釘宮理恵（ハガレンのアルくらいの高さの声）

【備考】

生前、転生後共に神奈川県横浜市出身。

第二次世界大戦中の大日本帝国海軍では中尉を務めていた。若くして隊長を務めたこともある。

特攻には反対していて、実際に部下達が死んでいくのを見てトラウマになりかけた。

両親、弟2人、妹3人の家族は爆撃で全員亡くなっており、天涯孤独だった。

16歳の時にもう飛行機の乗り方は熟知していた為、22歳で1度亡くなるまで6年近く乗っていたことになる。

撃墜数は58で、昔は坂井氏や笹井氏に鍛えられていた。

動体視力が良く、瞬発力がある。また、坂井氏のリハビリ（昼間に星を探す）に付き合っていたため、実質視力は左右肉眼で10・0（11・0はある）。

青春をする前に戦争が始まったので恋愛経験などは一切なし。

新型局地戦闘機の紫電改五型のテスト飛行中、エンジントラブルで墜落し死去。

ミカエルの計らいで転生するが、その際は直された紫電改と生前の愛機だった零戦二一型が転生後16歳の誕生日に届く。

性格は子供っぽいと思われやすいが、実は視野を広く持つており、全体を包むような包容力を持つ。

純粹で優しく、周囲の人間から愛される性格。動物にも懐かれやすい。

転生後は誰もが平和に暮らせる世界を目指す。

第1話 転生したラパウルの天使（前書き）

第1話です。Wikipediaなどを参考に、武装や機体の型式を少し弄りました。

第1話 転生したラパウルの天使

んう……。ミカエルさんと別れてから、私はどうやら教えられた通りに転生してみたんだ。

17歳の時に生き別れた懐かしい両親の顔が私の目に入る。

「決めたぞ、お前の名前は靖やすしだ！ 世界を安泰にして人に安らぎを与えられるような男になれよ！」

母、サチに抱えられる私に対し、勢い良く名前を授けた父、勝まさる。

私は長男だったので、もしかすると私の後に妹や弟が出来るかもしれない。

……。まあ、今の私はただの赤ん坊。気長に生きるとしよう。

キングクリムゾン！ ……と言わなければいけない気がした。

私が生まれた1926年からもう11年が経った。

前世とは違って妹は1人だけ、私が6歳の時に誕生。「澄あきらんだ花のように美しい人間になってほしい」という母さんのたつての願いで名前は花澄かすみに決定した。

実は前世の一番年の近かった妹と同じだ。生き別れた1人だと言うこともあり、私は素直に喜んでいた。

しかしそうめでたいことばかりではなかった。ついこの間にこのほ……扶桑の近海、扶桑海に、ネウロイが襲撃して来たのだ。

ミカエルさんが言っていたのはこの生物のことだったか。

その戦いでは扶桑の勇敢なウィッチ達の活躍により、勝利を収めたとか。

…実際は今新聞で読んだだけなので詳しくは知らない。というか、そのときの私を見つめていた父の目が何処か不思議そうだった。

「なあ靖…」

私が生まれたときから豪快な性格だった父が、この時ばかりはおとなしく見える。

「なんでしよう、父さん」

「お前に大切な話をしなければいけないんだ」

父さんの目は真剣そのもの。自分の事を薄々知り始めた私には今から父が話そうとすることが読めた気がした。

ついこの間の扶桑海事変、ウィッチの存在、幼い頃から男なのに魔力を行使できる自分…。

この要素からして、話されることが予測できないのが不思議なくらいなのだ。

「世の中にはウィッチ、つまり魔女が存在している。魔力を使える女性のことだ。だが特別な例だつてあるに違いない…」

そう言つて父さんは私の方を見据えた。

「靖のように、男ながら魔法が使えるのも、あながち不思議ではないのかもしれないと俺は思うんだ…」

「はい」

「だから、この力は信頼の出来る人間にしか教えてはいけないぞ。

世の中は変わったものをすぐに取り上げる傾向があるからだ」

父さんは一息ついて、また話し続ける。

「お前の名前の由来、世界を安泰にし、人に安らぎを与えるには、まだその力を知られる時じゃない。そのときまで我慢強く待て」

「はい！」

私はただ一度だけ、強く縦に首を振った。

「良い返事だ。お前にもそろそろ、飛行機の乗り方を教えてやりたいなあ。はっはっは」

緊張した空気が解け、父さんは高らかに笑う。私も釣られて微笑んだ。

第2話 靖14歳（前書き）

オリジナルかつアニメ以外は知らないので、違和感や相違点が多い
かもしれませんが。

ちなみに昨日はいつの間にか眠ってました（汗

第2話 靖 14歳

14歳になった年のある日、私と父さんはうちの倉庫でストライカーの開発に乗り出していた。

実は父さんは宮菱重工の技術者だったのである。……いや、前世でも零戦の開発班に回っていたけどね。

実質、私が前世で58の撃墜数を記録したのはこの人に色々コツや癖を教えてもらっていた体と考えている。

ただ、この世界ではストライカーの開発に力を入れていて戦闘機の開発は遅れてるんだとか。

九六式艦上戦闘機が九九式艦上戦闘機と言われていることには驚いたものだ。そして私の愛機の零戦や紫電はストライカーを指すらしい。

「なあ靖、今年完成した零式の後継のストライカーを考えているんだが、名前ってどんなのが良いと思う？」

零戦の後継機と言ったら1つしか思いつかなかった。

前世の世界では堀越さん（三菱の九六式艦戦と零戦を設計した技師）達の思いと熱意がこもったあの機体、烈風だ。

「烈風なんてどうです、父さん？」

敢えて言ってみることにした。

14歳みたいなセンスだとかは言わないでいただきたい。だって考えたのは私じゃないから。

「おお、それ良いな。じゃ、コイツは烈風って名前にしよか」

あっさりとした新しいストライカーの名称が決定した。そんな感じで良いのか父さんよ……。

……前世では、烈風の名は聞いたことがあるだけだった。

尉官仲間から紫電の方が断然良いと言われたりもしたものだが、その真相を知る前に僕は死んでしまったからわからない。

第一、海軍の思惑に踊らされていたんじゃないのかと思う。あの頭の硬い人たちの集まりだ。

技術者の意見や熱意などを理解せず、暴力で済ましていただろう。ただ1つ思っていることと言えば、堀越さん達の三菱があそこで止まる筈がないということ。

たとえ紫電の生産を命令されても、あの人たちなら裏で烈風の開発に着手していたであろうと思う。

《その通りじゃよ靖君》

11年ぶりに懐かしい声だ。お久しぶりです、ミカエルさん。

《うむ。その烈風なんじゃがな、君が亡くなってからの8月に一度彼らは紫電改の生産を言い渡されたんじゃない》

やっぱりですか…。

《これからは君の脳内で登場するよ。色々と力になりたいしのお。ふおっふおっふお》

ありがとうございます、ミカエルさん…。

「お前がいつか世界に名を轟かすときに、こいつがお前の相棒であつてほしいからな」

そう言って父さんは微笑み、私の頭をわしゃわしゃと雑に撫でた。

もう私は決意していた。ネウロイと戦う事を…。

「父さん。そのことなんです…」

「？ どうしたんだ？」

「いえ、言うしかないんだ。」

「私は海軍に入隊しようかと思えます」

その瞬間、父さんの目がカツと見開かれた。そしていつものような奥に優しさが見える眼差しを私に向ける。

「そうか、扶桑海事変の記事を読んでいるお前の姿からして、大分覚悟はしていたんだが…」

……いつも以上に静かな口調で零していく父さん。

「ようし、だったら、お前の門出を盛大に祝ってやれるよう、なおさらこいつを完成させにやいかな！」

元気さを取り戻り、私の右肩をバンバン叩いた。

「あ、でも、私っていうのはやめたほうが良いんじゃないか？」

少し考えてから父さんは提案して来た。

「？ なんです？」

「男なら、私っていうのもなあと思って」

「そういうことならわかりました。じゃあ父さん、僕はもうすぐしたら海軍の試験を受けてくるよ」

前世でもこのぐらいの年齢で覚悟したんだっけなあ。

16歳から入学を認められる海軍兵学校に入学するのを決めたのも、たしか今と同じぐらいの年齢の頃だ。

2歳になったばかりの花澄の頭を撫でながら、思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160z/>

ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

2011年12月10日22時47分発行